オプション教材は勉強に余裕があるときに取り組んでいただく教材です。

ミズキ

オプション教材ミズキ　読解マラソン集

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

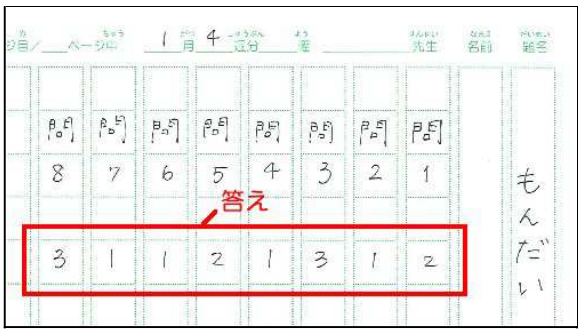
読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

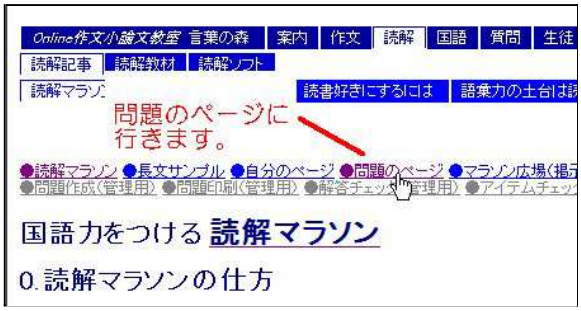
読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

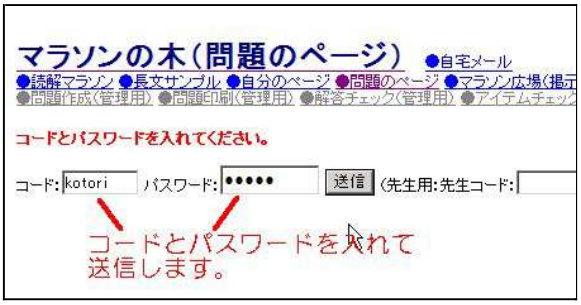


▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
http://www.mori7.net/marason/ki.php

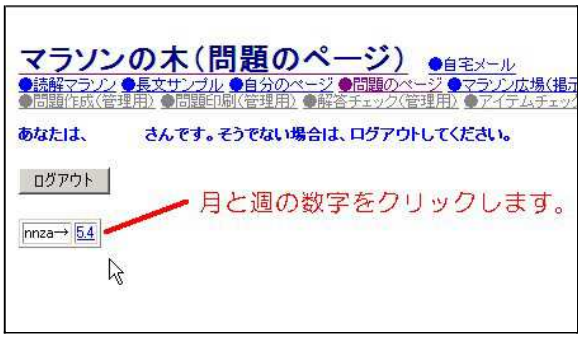
1.



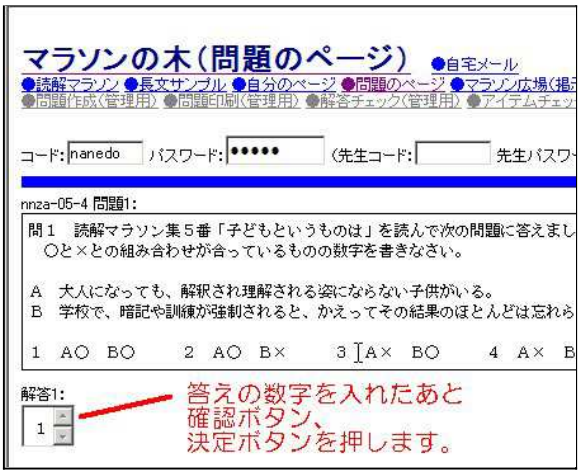
2.



3.



4.



5.

地球が出来上がるためには雨が重要であった。三〇〇〇年にわたって降り続いた長雨・大雨である。それは、焼けて溶けていた地球上のマグマと闘って、ついに海を作った大雨である。したがって、その降った分量はおおむね、今の海水の分量一・四×一〇の二十一乗キログラムぐらいである。しかも、地球全体の質量に比べれば一〇〇〇分の一にも満たない。

最近、地球の誕生を究めようとする地球物理学が、日本の学者もまじえて、急激に進んでいる。その中で、最近、諸外国、主として米・ソの学説を土台にして、日本の若い学者から提唱された地球生成の説がある。そこでは、この雨が重要に扱われ、世界の学者の注目を浴びている。

四十六億年ぐらい前、地球は宇宙空間に浮遊する火の玉で、その周囲にはおびただしい数の微惑星が塵のように漂っていた。広大な宇宙をベースにして見るから塵とは言うが、その一粒が直径一〇キロメートルほどのものも無数にあって、形成されつつあった太陽の周囲を回転していた。太陽も、星雲が収縮して火のかたまりになりつつ、円盤状に回転し、まさにこの時生まれようとしていた。

幸いと言おうか、地球は今日、九つの惑星となっている星の一つとして残り、太陽の炎の中に吸いこまれなかった。この地球に、微惑星が引きつけられて衝突し、地球はその衝突エネルギーを蓄えつつ、次第に大きく成長していった。直径一〇キロメートルほどもある微惑星は、約五〇〇〇年にわたって地球に降りそそいだ。この衝突が、ある一定以上の圧力だと、岩石に含まれている水分が水蒸気となって放出され、同時に二酸化炭素も放出された。これが、地球を取り巻く最初の大気となり、無数の微惑星の衝突・合体のために、水蒸気を主とする大気の分量は膨大な厚さに達した。

するとこのはかり知れないほどの厚さの大気は、温室のガラスのように、太陽から放射される熱を取り込むものの、それを逃がさないように機能した。いわゆる「温泉効果」である。そうして、地球の表面の温度が上昇しだした。

また同時に、相も変わらず微惑星の衝突は続き、水蒸気の密度は異常に高まって、今、われわれの吸っている平均気圧（一気圧）の一〇〇倍、つまり一〇〇気圧ほどになり、地球の表面は一二〇〇度ぐらいの温度になってやっと止まった。それでも、一二〇〇度というのは、岩も石も金属もみんな溶かす温度であり、地球の表面は約五〇〇〇万年ぐらいの間、ぐつぐつと煮え立っていた。

このころになって、微惑星の衝突も次第に少なくなり、地表の温度も少しずつ下がって、徐々に固まってきた。今、われわれの乗っている地球の骨格が出来上がってきたのである。

地表の温度が下がってくると、雲（大気）もだんだん下りてきて、雨を落としはじめ、地表の低いところや、大きなクレーターで穴の開いた部分などに、たっぷり水を溜めていった。時に雷や稲妻を伴い、われわれの知らないほどのものすごい勢いと分量で、三〇〇〇年間、絶え間なく大雨が降り続いた。

減ったとはいえ、未だ激突してくる大きな隕石。無数の火山の爆発と新たなマグマの流出。広大な大地の陥没。マグマを固め、岩石を打ち砕き、出来たばかりの陸を侵食する豪雨の轟きは、音と光の狂乱する耀の舞台であった。その響きは、まだ空気が出来ていないから、振動は水蒸気と固まりつつあった固体の中を走り、重々しい響きとその反響に鳴動する、いわば地球の産声でもあった。

（村山貞也『人はなぜ音にこだわるか』）

ラッコは、眠るときや嵐のときに岩陰などに避難することもあるが、一生のほぼすべてを海上で過ごしている。アワビ、ウニ、カニ、ハマグリ、イカなどを主食とする美食家であるが、冷たい海水にいつもつかっているため大食家でもある。体重二三キロのラッコは一日に六〇〇〇キロカロリーのエネルギーを必要とするため、体重の三分の一にあたる量の食物をとらなければならない。ちなみに、同じ体重の人間の子どもが必要とするエネルギーは、一日一八〇〇キロカロリーである。

ラッコの潜水能力はせいぜい五〇～六〇メートル、一分間である。そのため、海底の泥の中にいるハマグリを見つけたのに一回の潜水では掘り出せなかったときには、二回でも三回でも同じ場所に潜って貝掘りをする。貝を掘ったりカニやウニをつかまえるのは難なくこなすのだが、岩に固着した大きなアワビにだけは歯が立たない。そこでラッコは、両前足で手ごろな石をつかんでアワビの殻のへりを打つという、驚くべき戦術を使う。一個のアワビを剥がすには、少なくとも三回は潜らねばならないが、その間、ラッコは同じ石を使い続け、引き剥がしに成功するとその石は捨ててしまう。ここで特筆しておくべきは、採食に道具を使用する哺乳類は、人間とチンパンジーとラッコだけという事実である（もっとも、ホッキョクグマがアザラシに氷の塊を投げつけたという話もある）。ただしチンパンジーとは違い、ラッコが自分で道具を製作することはない。

ラッコの食事は必ず水面で、仰向けに浮いたままで行われる。岩から剥がしたアワビの中身を殻から取り出すのは、歯を使えば簡単にできる。ところがハマグリやイガイなどの二枚貝には、やはり歯が立たない。そこでラッコは、ここでも石を道具として使う。直径が一五センチ前後の平たい石を選び、水面に仰向けに浮いた胸の上に置き、それに貝を打ちつけて殻を割るのである。大きなウニなども、そうやって割り、中身を取り出して食べる。

ラッコには、同じ種類の食べ物を続けてつかまえては食べるという習性がある。イガイがびっしりとくっついている岩で一頭のラッコが八六分間も採食を続け、その間に五四個のイガイを食べたという観察もある。では、貝殻を割る石は貝を採るたびに拾うのかというと、そうではない。貝採りの間、同じ石を持ち歩くのである。前足の脇の下にあたる部分の皮がたるんでポケットのようになっており、そこに石をはさみ込むのだ。ただし、同じ石への執着はそれほど強くはないらしい。それまで使っていた石を何かの拍子に落としたりすると、別の石を調達する。一頭のラッコが続けて四四個のイガイを採食する間に、違う石を六個使ったという観察記録もある。

では、ラッコにはなぜ、道具を使うというたぐい希な行動ができるのだろうか。あるいは逆に、ラッコとごく近縁な他のカワウソ類はなぜ道具を使わないのだろうか。

カワウソ類のいちばんの特長は、器用な前足を持ち、どんなものでも遊びの対象にしてしまう才気があることである。ペットのカワウソが自分で蛇口をひねって浴槽に水を満たし、浴室を水びたしにしたという逸話もあるほどなのだ。つまりラッコの祖先は、冷たい海で大量の食物を手軽に入手するために、豊富に生息する貝類を利用するに際して石を使うくらいの能力は、はじめからそなえていたと考えられる。ラッコ以外のカワウソ類がそれをしないのは、単に貝類を食物として利用する必要がなかったからにすぎないのではないか。

貝を打ちつける石がないと、ラッコは貝と貝を打ちつけて殻を割る。このような行動の臨機応変さこそがラッコに道具使用を可能とさせているのだろう。この柔軟性を知能と呼ぶかどうかは別にしても、動物は遺伝的に固定された紋切り型の行動を繰り返しているにすぎないという狭量な考え方が鋭く変更を迫られることはまちがいない。

人生八十年時代と言われる昨今だが、八十年と言えばずいぶん長いような気もするものの、月に直して九六〇か月と言えば、それっぽちか、と思う。単位をさらに細分化すると一生は二万九〇〇〇日であり、四千週であり、七十万時間、二十五億秒ということになるが、さて、あなたはこのうちどの単位で測ったのが長くて、どれが短いとお感じになるだろうか？

どれも同じ長さでありながら、単位によって受ける感じがひどく異なるところが不思議なところだ。よく、同じ長さの平行線の両端に一方は外向き、他方は内向きの矢印を付けると、両者は同じ長さには見えなくなるというのがあるが、あれに似てなくもない。

こうした時間感覚を実生活に応用するとすれば、期待に胸をふくらませて待つ刻限と、できるだけ先に延ばしたいと思っている刻限とでは、単位をちがえて待つのが幸福な処し方と言えよう。

一方また自分の「人生経過時間」を日数で数えることもできるわけで、誕生日の他に「生まれて一万日目」とか「二万日目」とかを自分なりに数えてみれば、年数単位によってぼかされてきた一日一日の重みがどっしりと感じられるのではなかろうか？　ちなみに前者は二十七歳の時、後者は五十四歳の時におとずれる。

以上は個人の時間に関する話だが、次に「世代」の話をすると、（一世代を約三十年とすれば）たとえば「織田信長は、われわれ現代人の十三世代前の人物である」といった言い方が可能となる。十三世代と言えば、手を伸ばせば届きそうな時間的距離ではなかろうか？歴史の中から信長本人がヌッと顔を出しそうな、そんな実在感が感じられる数字である。

「四百年前」と言ってしまうから歴史上の人物になってしまうだけで、世代で数えればさほど昔の人ではなかったということだ。

さらに時代をさかのぼって源頼朝を例にとってみても、この人物にしてからが二十六世代前。だいたいが、西暦制定の基準となったイエス・キリストだって六十六世代前なのである。

歴史書などを読んでいる間は、キリストやそれと同時期の弥生時代など太古の昔のような気がするが、これとても、親子孫だけですでに三つを数える「世代」を六十いくつか数えるだけで手がとどいてしまう時代なのだ。

こうした例はいずれも、一定の単位でしか考えたことのない事柄を、それとは別の単位に置き換えたら新鮮に見えた例で、こうしたことは時間以外にも当てはまる。その一例として、体重の話をしてみよう。

唐突で恐縮だが、あなたは体重が何グラムおありだろう？　私は七万グラムだ。つまりは七十キロなのだが、グラム表示をすると私の頭には二つの連想が働く。

一つは、新生児との体重比較である。赤ん坊の体重は三千七百とか二千九百とか、たいていグラム表示である。私自身は生まれたときに三千五百だったと聞いているので、その時の二十倍に成長したことになる。こうした比較は同一単位でこそ容易にできる。それにしても、子どもの体重はどのくらいからキロ表示に変わるのだろう？

もう一つの連想は、やや陰惨でグロテスクである。

グラム表示を聞くと私の頭には肉屋の店頭の光景が浮かび、自分が肉牛にでもなったような気がするのである。なぜこういう連想が働くかと言えば、もちろん、肉牛の売買がすべてグラム単位だからである。

以上のように、単位の変換は、容易に日常性からの脱却を呼ぶ。最後に一つ、私からの質問。

「今度の日曜日はあなたにとって生まれて何度目の日曜日ですか？」

ある朝、少年は、目覚めるなり、「山へ登ろうよ。」と女の子に言った。「山へ登るの。」女の子は少年に問いかえすように言ったが、少年が、「うん、山や、裏の山や。松の木に登って、港を見ようよ。」とせきこんで言うと、女の子はしばらく少年を見つめていて、やがて、「うち、山なんか登ったことあらへん。」と、許しを請うように、おどおどと言った。女の子は足が悪くて山へ登ることができなかったのだ。だが、かがやいていた少年のまなざしが、みるみるくもっていくのを見ると、「ぼんは山へ登りたいの。」と言った。それから、「ぼんが登りたいんなら、うち行ってもええで。」としょんぼり言った。

女の子は、裏木戸を出て崖肌にかかるところで、もう、右足のひざを手でかばいながら、やっと少年のあとをのろのろと追っているのであった。少年は、はじめ、そんなことに気づかなかった。女の子に少しでも早く尾根からの景色を見せたくて、一人で先に駆け登って行った。女の子も自分と同じように駆け登って来るように、少年は思っていたのだ。だが、二つ三つ、まがり角をまがってから、女の子の姿が見えないことに気づいた。「はようおいでよ。」大きな声でそう言って、それから不安になって、あとへ駆けもどって行くと、女の子は、最初のまがり角をやっとまがりおえて、右足をひきずりながら懸命に登って来ていた。色のあせたメリンスの着物のひざぎりの裾から、真っ直ぐつっぱっている右足が見えた。そんなことは、毎日いっしょにいて、とっくに知っていたのだが、少年は、その時、はじめてそのことに気づいたように思った。

少年が女の子のそばまでもどって行くと、女の子はいっそう懸命に足をひきずりながら、「うち、のろくってかんにんな。」と言った。女の子は、せいいっぱい笑いを頬にうかべようとしていた。そばかすが汗ばんでいる目のまわりにういてきていた。少年は、それが女の子の泣き出す前の表情であることを知っていた。少年には、女の子の大きな黒い目から、今にもぽたぽたと涙がこぼれ落ちそうに思えたが、女の子はうれしそうに、にっこり笑ってみせて、「ぼん、はよ、行こ。」と言った。

少年は、そうすれば女の子が歩きやすくなるなどということは考えてもみずに、女の子の右肩へ自分の左肩をよせていって、女の子のからだの重みを自分で支えた。もう少年は尾根まで登ることはあきらめていた。だが、ついそこまで登れば、目の下に、港の黒い瓦屋根の並んだ町並や、いっぱいに汽船がうずまった港が見おろされるところがあることを思い出していた。せめて、そこまで、少年は、女の子を連れて行きたかったのだ。

少年が、やっと女の子をその山肌まで連れて行くと、女の子は、「わっ。」とさけんで、日だまりへとびだして行った。女の子はすぐころんで、メリンスの着物には芝草がまみれたが、そんなことはどうでもいいように、女の子は、「うち、こんなとこに来たん、はじめてや。」とさけぶように少年に言った。女の子のからだいっぱいに春の日ざしがこぼれていた。

（田宮虎彦『小さな赤い花』）

父の会社が二度目の不渡りを出したあと、父は家族にも行方を告げずにどこかへ姿をくらましてしまい、残された家族は散り散りに居を移した。成人してすでに勤めていた兄と姉は、それぞれ独立してやがて結婚した。が、まだ高校に入学したばかりだった英明は母と一緒に小さなアパートを借りることになった。

ふたりきりの住まいには充分な部屋ではあったが、どうにも処置に困ったのは以前の大きな家にあったもろもろの家財道具だった。

父の会社もいっときは勢いの良かったころがあったから、大きなベッドや大量の衣類、さまざまな調度品、母の趣味で蒐めていた高価な絵、あらかたは処分したつもりだったのに、まだまだたくさんの物が英明たちの手もとに残されていた。けれど住まいが狭くなると、家具類はおろかレコードや本の類までもが、邪魔で厄介なものに感じられるのだった。英明ははじめて、家という「いれもの」がなければいくら高価な物でも何の役にも立たないということを知った。

幸い知人の厚意を享けることができて、母は空き倉庫を安く借りてきた。英明と母はその倉庫のそばのアパートを借り、もろもろの物を倉庫に収めさせてもらった。そうしておいてもどうなるものでもないが、母にしてみればいつかまた役立つときが来るかも知れないという、儚い願いのような気持ちがあったから、残った家財道具を始末せずに保存しておく気になったのだろう。

その倉庫から火が出たのは、英明が高校一年の年の冬だった。

家事の原因は、近所の子どもたちが割れた窓から倉庫にしのびこみ、中で火遊びをしたことらしかった。火はもの凄い勢いで燃えさかり、倉庫は全焼した。

未だに英明はその晩のことを思い出すと、頬を焦がす火の熱気をそのまま感じるような気がする。消防車のサイレンに気付いて何気なく表を見たとき、頭の中は驚きのあまり真っ白になって、英明は一瞬考える能力を失った。

母とふたりですぐに駆けつけたが、すでにもうなす術はなかった。英明と母はだらりと顎を下げて、かつて自分たちの身近にあったさまざまのものを火が焼き尽くすのを見ていた。

――あらあ……。

そのとき、隣りに立っていた母はぼんやりと呟いた。まるで他人ごとのような口ぶりだった。

振り返った英明が見た母の横顔は炎に照らされてオレンジ色に染まり、見開いた瞳にもやはりオレンジ色の炎しか映っていなかった。たぶん母は、そのとき何も考えていなかったろうと英明は思う。

そのときの母子は、泣き叫んで喚き散らしてもいい立場だった。しかし英明も母も、魂を抜かれたように呆然と突っ立ったまま、何もせず何も言わずただただ燃える火を見ていた。

あのときほど母が自分に近いところにいたことは、後にも先にもなかった。母も英明も、その一年足らずのあいだにとても安らかとはいえぬ時間を過ごして来ていて、そうしてひどく疲れていた。自分たちには手の負えない勢いで燃えさかる炎に対して、怒ったり悲しんだりする気力さえなかったのかも知れない。

（鷺沢萠『朽ちる町』）

〔「わたし」はサワンというがんを飼っている。ある夜、サワンは屋根に登り、空を飛ぶ三羽のがんと鳴きかわしていた。〕

わたしはサワンが逃げ出すのを心配して、かれの鳴き声に言葉をさしはさみました。

「サワン！　屋根から降りてこい！」

サワンの態度はいつもとちがい、かれはわたしの言いつけを無視して、三羽のがんに鳴きすがるばかりです。わたしは口笛を吹いて呼んでみたり、両手で手招きしたりしていましたが、ついにたまらなくなって、棒ぎれで庭木の枝をたたいてどならなければならなくなりました。

「サワン！　おまえはそんな高いところへ登って、危険だよ。早く降りてこい。こら、おまえどうしても降りてこないのか！」

けれどサワンは、三羽の僚友たちの姿と鳴き声がまったく消え去ってしまうまで、屋根の頂上から降りようとはしなかったのです。もしこのときのサワンのありさまをながめた人があったならば、おそらく次のような場面を心に描くことができるでしょう。

――遠い離れ島に漂流した老人の哲学者が、十年ぶりにようやく沖を通りすがった船を見つけたときの有様――を人々は屋根の上のサワンの姿に見ることができたでしょう。

サワンがふたたび屋根などに飛び上がらないようにするためには、かれの足をひもで結んで、ひもの一端を柱にくくりつけておかなければならないはずでした。けれどわたしはそういう手荒なことを遠慮しました。かれに対する私の愛着を裏切って、かれが遠いところに逃げ去ろうとはまるで信じられなかったからです。わたしはかれの翼の羽を、それ以上に短くすれば傷つくほど短く切っていたのです。あまりかれを苛酷に取り扱うことをわたしは好みませんでした。

ただわたしは翌日になってから、サワンをしかりつけただけでした。

「サワン！　おまえ、逃げたりなんかしないだろうね。そんな薄情なことはよしてくれ」

わたしはサワンに、かれが三日かかっても食べきれないほどの多量のえさを与えました。

サワンは、屋根に登って必ずかんだかい声で鳴く習慣を覚えました。それは月の明るい夜にかぎられていました。そういうとき、わたしは机にひじをついたまま、または夜ふけの寝床の中で、サワンの鳴き声に答えるところの夜空を行くがんの声に耳を傾けるのでありました。その声というのは、よほど注意しなければ聞くことができないほど、そんなにかすかながんの遠音です。それは聞きようによっては、夜ふけそれ自体が孤独のためにうち負かされてもらす嘆息かとも思われ、もしそうだとすればサワンは夜ふけの嘆息と話をしていたわけでありましょう。

その夜は、サワンがいつもよりさらにかんだかく鳴きました。ほとんど号泣に近かったくらいです。けれどわたしは、かれが屋根に登ったときにかぎってわたしのいいつけを守らないことを知っていたので、外に出てみようとはしませんでした。机の前にすわってみたり、早くかれの鳴き声がやんでくれればいいと願ったり、あすからはかれの羽を切らないことにして、出発の自由を与えてやらなくてはなるまいなどと考えたりしていたのです。そうしてわたしは寝床にはいってからも、たとえばものすごい風雨の音を聞くまいとする幼児が眠るときのように、ふとんを額のところまでかぶって眠ろうと努力しました。それゆえ、サワンの号泣はもはや聞こえなくなりましたが、サワンが屋根の頂上に立って空を仰いで鳴いている姿は、わたしの心の中から消え去ろうとはしませんでした。そこでわたしの想像の中に現れたサワンもかんだかく泣き叫んで、実際にわたしを困らせてしまったのでありました。

（井伏鱒二『屋根の上のサワン』）

読解マラソン集 7番 この数年、おりおりに mi3

この数年、おりおりに森を歩いている。
日本列島で森といえば山のことだが、私のは登山ではなくて森ある きだ。頂上をめざしてひたすら登るという年齢ではなく、そんな体力 もないのだが、山のすそや中腹の森をゆっくり歩いていると気が休ま り心が満ちてくる。
谷川の石河原で寝そべってみたら若葉のざわめきと水の音と鳥の声 につつまれている心地よさに、半日を過ごしてしまい、日暮れどきに なってそのまま帰って来たこともある。紅葉のブナの森を歩いていた ら、その前から立ち去りがたい大きな木があちらにもこちらにもあっ て、そのときも気がつくと半日が過ぎていた。その日予定していた別 の森には行かずじまいだった。なにも数多くの森をせっせと歩きまわ ることはない。訪ねた森の数や歩いた距離をだれかと競うわけではな いのだから、森の豊かな時間のなかに身を置いて、森の大きないのち の鼓動を静かに聴きつづける。時を忘れさせる森では足はおのずと ゆっくりになり、しばしば立ちどまってしまう。
そういう森で見かけるのが、倒木だ。三人抱え四人抱えという大き な木が倒れている。何百年かを生きてきて、半ば朽ちて立っていた木 が、ある日強い風に倒されたのだろう。太い幹の途中から折れて上部 が地上に横たわっている。倒れたときの衝撃でいくつかに分かれて 縦に並んでいる倒木もある。
古くなった倒木には苔が生えている。倒木の割れ目にたまった土に 若木が育っていたりする。倒れた木そのものがもう半ば土のように なって、そこに育った木が倒木同様に太くなり、倒木をかかえて天に そびえているものも見かける。森はそういう生と死をはらんで大きな いのちを生きつづけている。
私の知るかぎり、時を忘れさせるほどに豊かな森は、倒木のある森 だ。人工林には倒木がない。伐採されて搬出を待っている木が 寝かされているだけで、自然の倒木が次の世代の木を育てているとい うことはない。日本庭園にも倒木を見かけることはまれである。自然 の森を模してあり、半ばは自然の森になっている庭園もあるのだが、 ほんとうの森とちがうのはそこに倒木のないことだ。若木を

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

育てたり虫たちが巣くっている倒木がない。まして、公園には倒木が ない。台風で倒れることもあるだろうが、何日かしたらクレーン車な どがやって来て取り除いてゆくだろう。人工林にも日本庭園にも公園 にも、自然の森に流れているあの豊かな時間はない。
ある森で、三人抱えでは足りないほどの大きなブナの木が、上半分 が折れ倒れて、下半分ばかりが立ち枯れているのに出会った。立って いる幹は大きく割れていた。近づいてみると割れ目の上下に黒く焦げ た線が走っていた。落雷でやられたのだろう。巨木のこういう死もあ るのだなと思いながら太い幹の裏にまわってみると、おどろいたこと に一本の太枝が張り出して豊かな葉を茂らせていた。
生と死がさまざまなかたちを見せているのが、森というものだ。生 と死を精妙に織りなして、森という大きないのちが息づいている。

（高田 宏 の文章より）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

その少年はまるまると太っていて、いつも腕白であった。クラスの中でもとりわけ貧しい家の子供で、給食費などは期限どおりに納めたことは一度もなかった。あるとき、私は少年に、
「おまえ、なんでそないに太ってるねん？」
と訊いた。小さい頃から「青びょうたん」とあだ名をつけられていた痩せっぽちの私は、なんとか人並に太りたいと子供心に念じつづけていた。雪深い富山から、兵庫県の尼崎に引っ越してきて一カ月ばかりたった頃、私が小学校五年生のときである。
「寝る前に、たこ焼きを食べるんや」
少年はそう教えてくれた。毎晩、夕刊を売って歩き、その稼ぎでたこ焼きを買うのだと、誰にも内緒にしていた秘密まで打ち明けてくれたのだった。酒乱の父と、どんな仕事をしているのか判らないが、めったに家に帰ってこない母を待つその少年が、いたしかたなく自力で金を稼ぎ出し、毎夜毎夜、たこ焼きばかりを食べつづけていたことなど私は知る由もなかった。
「僕も夕刊を売って、たこ焼きを買うんや」
私がそう言うと、母は血相を変えて反対した。父は笑って、
「ぎょうさん儲けて、お父ちゃんにもおごってや」
と許してくれた。
当時、阪神電車の尼崎駅周辺には、小さい屋台や小料理店が軒を並べ、ならず者たちが凍てつく露地のあちこちにたむろしていた。私は少年とつれだって、夕刊の束を小脇に、飲み屋のノレンをくぐっていった。
誰も夕刊を買ってはくれなかった。しつこく売りつけようとして酔っぱらいに突き飛ばされたり、尻を蹴られたりもした。寒風の吹きすさぶ大通りから、裸電球のともる薄暗い露地にもぐり込み、一軒一軒新聞を売り歩いているうちに、私はだんだん情けなくなり、家に帰りたくなってきた。だが、断られても断られても夕刊売りをやめようとしない少年に引きずられて、夜更けまで場末の飲み屋街を歩きつづけたのだった。

「きょうは調子が悪いなァ……」
と少年が立ち停まった。
「……僕、もう帰らんと怒られる」
その言葉で、少年は私から新聞の束を受け取り、
「僕はもうちょっとねばってみるさかい」
と言い残して、再び暗い露地へと消えて行った。私は体中が凍えていた。夜道を震えながら帰った。家に入ろうとしたとき、誰かの歩いて来る音が聞こえた。父であった。父は「おかえり」と言って私の耳を掌で包んでくれた。その夜、銭湯からの帰り道、父がさとすように呟いた。
「おまえのたこ焼きと、あの子のたこ焼きとは、味が違うんやでェ」
それからちょうど十年後に父は死んだ。父の死後、何かの折に、夕刊を売り歩いた一夜の思い出を母に語った。そしてそのとき母から、あの夜、尼崎の歓楽街で新聞を売り歩く私のあとを、父が最初から最後までずっと尾けていてくれたことを聞いたのであった。
いまでもときおり、場末の歓楽街を歩いているときなど、露地のくらがりからまるまると太ったあの少年が、夕刊の束をかかえて走り出てくる幻想にかられる。そんなとき、オーバーで身を包んだ父が、物陰からじっと私を見ているような気もするのである。

（宮本輝『夕刊とたこ焼』）

読解マラソン集 ９番 私は、懐中時計を mi3

私は、懐中時計を打紐でズボンのベルト通しに結わえつけておくのが習慣になっていたが、どういう弾みか紐が切れているのに気が付かず、時計を道路に落とした。時計に対してこのような無作法をしたことはほとんどなかった。若いころに、ズボンの隠しに入れたまま鉄棒に飛びつき、尻上がりをしてガラスを割った記憶はあるが、多分それ以来の失敗であった。

何度も振って耳にあててみたが鼓動は止まったままだった。その日宿へ戻る時にその時計屋へ持っていった。自分で落としておきながらこんなことを言うのは心苦しいけれどもなるべく急いで修繕を頼んだ。すると主人は裏側の蓋を開け、心棒が折れているのを確かめながら、急いでやるけれども、同じ心棒が手元にないので四日はもらいたいといった。心当たりの仲間の時計屋に連絡をして、そこにあればいいが……。

その時私は今向かいの宿屋に仮住まいをしていることを話すと、それは困るだろうと言って腕時計を貸してくれた。銀めっきが剥げて古いものだが、時間は正確だから、その間使ってくれと、遠慮する私に貸してくれたのだった。借り物の時計をなれない手首にはめて気になって仕方がなかったが、時計屋の好意が嬉しかったし、実際に大助かりだった。

今から三十数年前である。

小さい時計屋の店には、さまざまの形の掛け時計があったが、その幾つかは振り子が動いていた。それは売り物ではなく、一応修繕を終えてから調子を見ている預かり物であった。退院前に大事をとって様子を見られている回復期の連中であった。

その振り子の動き具合を見ていると、いかにもせっかちや、ゆったり構えているのやらいろいろいて、時計の性格がよく分かって面白かった。これらの時計と一緒に寝起きしている時計屋の主人が、それをどう感じているかちょっと尋ねてみたいような気持ちがあったのだが、別に親しくもなく、今店に来て話をしたばかりの人にそんなことを尋ねるうまい言葉も思いつかないままに黙っていた。

四日後に寄ってみると私の懐中時計は修繕ができていた。重宝した腕時計を返して自分の時計を受け取った時に、主人の右手の黒光りしている柱に八角形の柱時計が掛かっているのを見た。四日前に来た時にも同じ柱にあったのかも知れないが、気が付かなかったらしい。

腕時計を貸してくれた好意に対して何かこの店で買い物をしたい気持ちもあったが、それをあまり露骨に見せるのもいやで、何の意味もないように、それが売り物かどうかを聞いてみた。

それは想像したとおり時計屋の時計であった。しかも大切な時計であるのが分かった。その主人が生まれた時に、時計屋でもなかった彼の父親が、別にその記念にというつもりでもなかったのだろうが買ったものだということだった。ぜんまいは幾度か取り換えたが、ずっと動いているそうだった。そしてこんなことも話した。

この時計は、子供のころには台所の柱に掛けてあって、ガラスが曇って黄ばんでくると、踏み台に乗ってそれを拭くのが自分の役目だったし、時計屋に奉公するようになってから、また自分で店を出すようになってからはなおさらのこと、これだけは絶対に狂わせないように気を配ってきたそうである。

そこまで深い結びつきができてしまうと、この柱時計が止まる日に自分の寿命も尽きるというような気がしてくるのではあるまいか、あるいはこの時計に自分の運命が左右されている感じを常に抱くようになるのではないか。そんなことを私はとっさに思ったが、無論それは口にしなかった。

（串田孫一『柱時計』）

いつのことだったか、教育熱心で知られている友人の歯科医がうかぬ顔をしているので、どうしたのかと尋ねたら、日曜日に子供をダムのある山に連れて行ったところ、子供がそこに満々とたたえられている水を見て、「うちの台所に出てくる水には色がないのに、ここの水はどうして青いの。」と質問してきた。そこで、「海の水を見てごらん。青いだろう。水はたくさんになると青く見えるようになるのだよ。」と教えたら、「水はたくさんになると、どうして青く見えるの。」と反問してきた。これにはぐっとつまって、うまく答えられなかったので、ひどく面目をつぶしたということだった。実は、科学というものは、このように疑問を持ち、その疑問を解決しようとするところから始まるのである。

さて、その人間のいだく疑問であるが、われわれの祖先がいだいた程度の疑問の数々は、科学の進歩につれて、しだいに解きほぐされ、今日いまだにかたづかないなどというものはそんなにたくさんはない。それでは、現在のわれわれは、祖先の人々のようには疑問をいだかないかというと、実はそうではなく、今日われわれがいだいている疑問は、その数においても何千年も前の時代とは比較にならぬほど多いし、その内容・程度も大きく変わってきているのである。

人間は、もともと知ることを求めるものであるから、一つの疑問をいだくと、それを解こうとして、観察・実験などの手段に訴え、思考を繰り返すといった努力を重ねて、ついにはその疑問を解決するのである。そして、知ることの楽しさ・うれしさに大きな満足を覚えるのであるが、それと同時に、さらに新しい期待に心をはずませるのである。というのは、最初の疑問を解決するまでの過程あるいは結果において、必ずさらにいくつかの新しい疑問が生まれ、初めの疑問が解決したあとも、これらの新しい疑問の多くは、初めのそれよりさらに高度のものであるが、新しい別のものである場合も少なくない。

このように考えてくると、科学というものは、疑問の積み重ねの上に進歩してきたと言える。つまり、疑問のない所に科学の進歩はないのである。だから、われわれが、自然現象なり社会現象なりについて疑問をいだかないということは、決して喜ぶべき状態ではない。それは、科学の進歩を止めてしまうことを意味するからである。

思うに、疑問を持たないというのは、すべてのものを知り尽くしてしまって、何一つわからないことがない場合か、あるいは何もわからなくて、わからないことがわからないといった状態であるかのいずれかである。この世の中に、複雑で、おくゆきの知れない自然や社会のすべてを知り尽くした人などがいるはずはないから、もし疑問を持たない人がいたとしたら、その人は進歩することを捨ててしまった人である。いろいろな事物や現象について次々に疑問をいだくのは、その人が進歩している証拠である。

要するに、科学的であるということは、一面、疑問を解決し、疑問を減らすことでありながら、多面、疑問をふやすことでもある。われわれは、いくつになっても、絶えず疑問を持ち続け、その疑問の解決に向かって努力したいものである。なぜならば、そのことはその人の進歩・成長につながるばかりでなく、人間の社会の幸福と発展にもつながるからである。

若いころ、僕はよく山へ行った。当時はバスもあまりなく、駅に降りてからはひたすら歩くだけで、川沿いに山懐に入って行く道は長かった。そこで僕が驚嘆するように知ったことは、よくこんなところにまでと思うほど谷の奥のほうにまで、猫の額のような田んぼがあったことだった。

また、山の中には杣道があり、粗朶を背にした土地の人とも会ったものだった。そして、谷も山も実に美しかった。

米が過剰になって、政府が減反政策を始めた時、僕がまず感じたことは、あの谷沿いの田はもうとっくになくなったろうな、ということだった。そこではじめて「谷は荒れるだろうな」と気付いた。

農家の人は、田んぼがあるからそんな奥まで入り、その田を守るために谷のようすや山のようすに気をつかう。その田がなくなれば、谷の斜面が崩れていても、倒木が谷をせき止めていてもわからない。そうなれば、鉄砲水が起こり、谷はさらに荒れて下流の地域に被害をおよぼす。

つまり、そういう田んぼは、山や川と人間生活との間に緩衝帯の役割を果たしていたということだ。しかもそれは、何百年もの間、農家の人々によって支えられ続けてきた。そのおかげで僕らは、水の猛威に見舞われることなく、美しい自然とつきあってこられたということだ。

もはやあんな谷沿いの田んぼは、日本中どこへ行ってもありはしないだろう。そして米が自由化されたとしたら、水田はごくごく条件のいい平野部にしか残るまい。

ということは、何百年にもわたって保たれてきた自然と人間の折り合いは、初めて変化を余儀なくされることになる。僕らがそれによって何を失うか、それは今想像できることよりはるかに大きなものに違いない。

ヨーロッパの文明は、自然を征服するかたちでつくられてきたが、日本の場合はそうではない。征服や加工ではなく、自然と折り合いをつけながら文明をつくってきた。

たとえば、米を作ればイナゴが繁殖するが、僕らの先祖は、そのイナゴも食品として取りこんでしまった。日本人の自然との付き合いかたは、そこまで一体化しているのである。

またその発想で、山の幸海の幸も、さほど加工することなく独自の食文化に高めてきた。それだけではない。短歌や俳句でわかる通り、圧倒的に詠われているのは自然であり、自然に託した心象である。

こうした伝統的な文化はここまで工業化した現在でも、僕らの中に深く根を下ろしている。宗教も、四季折々の生活行事も、すべて稲作農耕文化を基盤にしているのだ。

言うならば、稲作農家というのは日本文化の母胎である。文化というのは博物館を造ることではない。歴史に耐えてきたわらぶき屋根の家を、形を変えて利用し続けることなのである。

今の若い人は、リッがいいとか悪いとか、何ごとによらず経済合理性で割り切りたがる。というより、そんなふうにドライに割り切った言い方をすることが格好いいと思っているふしがある。

それからすれば米の自由化も、「そんなに値段が違うんなら、しかたないじゃない」と言うかもしれない。しかし、地球規模で気象が変わり、アメリカで米がとれなくなることもあり得ることを考えれば、それはどこまで合理的かということだ。

あるいは中には、「ご飯とかはあまり食べないから」と、どうでもいいと思っている人もいるかもしれない。おそらく今の若者は、米よりパンのほうが好きだろう。それはそういうものだと思う。

なぜなら味覚というのは、時間をかけ訓練されて磨かれるもので、若いうちは微妙な味はわかりにくい。はっきり言えば、うまいものをさんざん食べてきて四十、五十になり、「やっぱり飯はうまいなあ」と感じられるようになるのが、米の味というものだ。その時になって、うまい米がないと言っても遅いのである。

日本人はなにかというと人に贈りものをする。たいした意味がなくても、盆と暮れになると、中元、歳暮を贈らないと気がすまない。虚礼ではないか、やめてしまえ、という声がときおりおこるけれども、贈答はいっこうに減らない。われわれは贈りものをしないと落ち着かないようにできているのかもしれない。同じ日本人なら、同じような気持ちをもっているから、ときにおかしいと思う人がいても、贈ればだいたい受け取って、形だけにしても、ありがたかった、うれしかった、と礼を言ってくれる。

そういうことになれ切っていると、相手が外国人であっても、ついつい同じことをしてしまう。こちらが善意であれば、その気持ちだけはすくなくとも通じるだろうとのんきに考える。それがそうではないことがあるのだということは、苦い経験をしてからでないと、わからないからやっかいである。

たとえば、アメリカ人にとって日本式の贈りものがどういうように受け取られるか。これについてはこういうエピソードがある。

日本に住むあるアメリカ人が隣家の日本人の奥さんからある日、くだものをもらった。くれたのは奥さんだが、奥さんが買ってきたものではない。奥さんのところへ来た知り合いが奥さんに贈ったものだ。この知人はクルマで来て、そのアメリカ人の庭先へ駐車させてもらった。奥さんとアメリカ人との間で、必要なときには自由に使っていいという話のついている庭先である。しかし客は知らん顔ではまずいと思った。奥さんにもってきたくだものを、アメリカ人にあげてくれと頼んだ。奥さんにはまた別のものを考えると言うのであろう。奥さんは言われるままに、客が帰ったあと、くだものをもってアメリカ人のところへ来たのである。

ところがアメリカ人は喜ばない。どうしてくれるのかわからないのだ。やるといわれても、迷惑だと感じる。こちらがくだもの好きだとわかってくれたのではない、しかも、会ったこともない人からのくだものをどうして受け取れるか。相手はかまわず、そういうものをくれるのは、こちらの人間、個性を無視していて、おもしろくない。駐車させてもらってありがたいと思ったなら、なぜ本人がやってきて、ひとこと、ありがとう、と言ってくれないか。そのほうがわけのわからないくだものをもらうよりどれだけうれしいか知れない。会えば、知り合いになるチャンスだって生まれる……。そんな風に感じたが、このアメリカ人は結局、隣の奥さんのくだものを受け取った。断っては、奥さんの顔をつぶすことになるだろうという日本的考え方をしたものである。

プレゼントをしていいのは、相手の好み、趣味をよく知っていて、それに合ったものがあるときである。奥さんのところへもってきたものを、そのまま隣家のアメリカ人へまわすのは、送り先の人のことを無視するのもいいところで、はなはだまずい。

贈りものはときとして、とんだ災難のもとになることもある。

日本で勉強しているアメリカ人の女子大生が、バイクでジグザグ走行していてトラックに接触、転倒し、軽い怪我をした。入院したが、非は自分側にあると思っていたから、トラックを責める気はまったくなかった。ところが、トラックの運転手は、いくら自分の責任ではないにしても、現に相手は入院している。放っておけない気がしたのだろう。ブドウをもって見舞いに行った。これがいけなかった。それまでは神妙だったアメリカ人学生は、そこで考えを一変させた。この運転手は自分にワイロを贈ろうとした。悪い人間である。事故はこの運転手によっておこった。というような話をつくり上げてしまったのである。

トラック会社と運転手を訴えて、裁判に勝ち、トラック会社から多額の賠償金をせしめることに成功した。ずいぶん高いことについたブドウである。善意がとんでもない解釈をされて仇になってしまった。贈りものの文化が万国共通のものではないことを知らないでおこった小悲劇である。ことにあまり意味のないプレゼントをするのになれていると、つい気軽に人にものを進呈しがちになる。相手をよく考えてからでないと贈りものをしてはいけない。国際的な場面においてはとくにそれに注意する必要がある。

（外山滋比古『英語の発想・日本語の発想』）

読解問題 7月4週分

問1　読解マラソン集1番「地球が出来上がるためには」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　四十六億年ぐらい前、地球は火の玉で、周囲には目に見えないぐらいの塵が多数漂っていた

B　地球に微惑星が衝突することによって、地球の最初の大気が生まれた
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問2　読解マラソン集1番「地球が出来上がるためには」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　五〇〇〇万年ぐらい前の地球の表面は、ぐつぐつと煮え立っていた
B　高温高圧の地球が冷えたあと、三〇〇〇年間毎日大雨が降った
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問3　読解マラソン集2番「ラッコは、眠るときや」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　ラッコは冷たい海で暮らすため、大量の食べ物をとらなければならない
B　チンパンジーは道具を作ることがあるが、ラッコは道具を作らない
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問4　読解マラソン集2番「ラッコは、眠るときや」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　ラッコは、アワビを取るときに石を使うが、アワビを食べるときには使わない
B　ラッコは、カワウソ類の中では最も賢いと言われている
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問5　読解マラソン集3番「人生八十年時代と」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　時間の単位を短くすると、感じる時間も短くなる
B　年数で数えるよりも、世代数で数える方が長く感じる
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問6　読解マラソン集3番「人生八十年時代と」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　赤ん坊の体重も、キログラムで表示するとわかりやすい
B　自分の体重をグラムで表示すると、自分が肉屋の主人になったような気がする
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問7　読解マラソン集4番「ある朝、少年は、」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　少年は、女の子の足が悪いことをそれまで知らなかった
B　女の子は、足が悪くなる前は山に登ったこともあった
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問8　読解マラソン集4番「ある朝、少年は、」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　女の子は、苦しそうだったが涙を見せなかった
B　少年は、女の子を尾根まで連れていくことはできなかった
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

読解問題 8月4週分

問1　読解マラソン集5番「父の会社が」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　英明と母は、大きな家から小さなアパートに引っ越した
B　高価な物は、家に置いていなくても何かの役に立っている
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問2　読解マラソン集5番「父の会社が」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　倉庫の火事のために、中にあった家財道具は焼けてしまった
B　倉庫の火事は、二人の力ではとても消せるものではなかった
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問3　読解マラソン集6番「「わたし」はサワンという」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　サワンは、いつもは私の言いつけをよく守っていた
B　私は、サワンの羽を短く切るような手荒なことは遠慮した
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問4　読解マラソン集6番「「わたし」はサワンという」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　サワンは、毎朝、屋根に登ると、かんだかい声で鳴くようになった
B　私は、サワンがかんだかい声で鳴くのを止めることをあきらめた
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問5　読解マラソン集7番「この数年、おりおりに」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　私の趣味は、犬を連れて森の中を散歩することだ
B　森林は、深いので、足がゆっくりになり、しばしば立ち止まることもある
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問6　読解マラソン集7番「この数年、おりおりに」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　日本庭園も、自然の森のような倒木を置いておくとよい
B　自然の森には、クレーン車などが入れないので、倒木もそのままになっている
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問7　読解マラソン集8番「その少年は、まるまると」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　その少年は、夕飯も満足にとれないほど貧しいので、夕刊を売ってたこ焼きを食べていた
B　私は、少年が自分の力でお金を稼いでいることに心を動かされ、自分もやってみようとした

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問8　読解マラソン集8番「その少年は、まるまると」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　初めて夕刊を売り歩いた日、私は夕刊がなかなか売れないものだとわかった
B　少年のたこ焼きは、私のたこ焼きに比べて上手にできていた
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

読解問題 9月4週分

問１　読解マラソン集９番「私は、懐中時計を」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　私は、活動的なので、ときどき時計を壊してしまうことがあった
Ｂ　その時計屋は、修繕を終えた時計を売っていた
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問２　読解マラソン集９番「私は、懐中時計を」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　時計屋の主人は、時計が直るまで古い腕時計を貸してくれた
Ｂ　私は、八角形の柱時計をほしくなって値段を聞いてみた
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問３　読解マラソン集１０番「いつのことだったか」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　現代人は、昔の人よりも科学的知識が発達しているが、同時に疑問の数も多くなっている

Ｂ　人間は、疑問を抱くと、その疑問を解決する過程で新たな疑問を見つける
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問４　読解マラソン集１０番「いつのことだったか」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　疑問を抱かなくなることが、人間と科学の最終的な目標である
Ｂ　疑問を抱くことで、人間は成長し、社会は発展する
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問５　読解マラソン集１１番「若いころ、僕は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　谷沿いの田んぼが荒れると、下流の人間生活にも被害が及ぶ
Ｂ　谷沿いの田んぼは、山や川と人間生活との間に緩衝帯を設けるために開発されてきた
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問６　読解マラソン集１１番「若いころ、僕は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　文化とは、昔からある古いものを形を変えずに伝えていくことである
Ｂ　年をとると、パンの味のよさも米の味のよさも、より深くわかるようになる
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問７　読解マラソン集１２番「日本人はなにかというと」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　贈り物をもらえば喜ぶのは、世界共通の考えである
Ｂ　中元、歳暮などあまり意味のない贈り物が日本では減らない
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問８　読解マラソン集１２番「日本人はなにかというと」を読んで次の問題に答えましょう。

　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　国際的な場面では、贈り物をすることはワイロを贈ることと同じだと考えられている
Ｂ　どんなトラブルが起こっても、善意であれば、その気持ちだけは通じる
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×